

Topic!

都市防災教育研究センター(CERD) 副所長 三田村 宗樹

防災士養成講座がはじまりました

防災士の資格は、NPO法人日本防災士機構が認証する資格です。自助・共助・協働を原則として、社会の様々な場で防災力を高める活動を十分な意識と一定の防災関係の知識・技能をもって、地域・企業・行政と協働しながら活動できる人材を育成する目的で設定されました。すでに全国で10万人を超える防災士が認証されています。CERDでは、コミュニティの防災力向上には、1万人のコミュニティ(小学校区)で防災力を高める活動を支える人材として、その1割つまり1000人が必要であると考えています。つまり、防災士認証を受けた人材はもっと必要であるとみられます。そこで大阪市立大学では今年度より、総合教育科目「コミュニティ防災」を防災士養成のための講義として設定し、その授業がスタートしました。京阪神地区の大学として初めてのものとなります。今年度の受講者合計は178名、そのうち20名余りの学生が防災士資格取得をめざしたいと意思表示を示し、もう少しその希望者は増える状況にあります。この講義は、一般市民も受講できるようにしており、今年度は9名の一般受講者が防災士取得をめざして学んでいます。熊本地震が発生し、顕著な地震被害が見られ、今後の防災活動へ向けた人材育成は重要です。大阪市立大学で育った防災士が今後の地域の防災活動や災害時に活躍してくれることを期待しています。



首都大学東京

市古 太郎

災害復興・都市防災研究室「寄り添うプランニング」をめざして

災害に関する研究は、地震学を中心とする理学、耐震工学を中心とする工学、人間や社会の側面に着目する行動(社会)科学の3つの領域から構成されますが、首都大学東京でもこの3つの領域について、研究と教育活動が展開されています。災害復興・都市防災研究室は3番目の領域を担当し、名称のとおり、国内外の災害と復旧復興の現場調査に従事し、災害復興の現場で得られた知見を東京を中心とした大都市未被災地の防災まちづくりにフィードバックしていくことをミッションとしています。当研究室の具体的な活動としては、東日本大震災後の気仙沼市階上地区における生活再建のデザイン支援、石巻市雄勝地区や東松島市での住まいと生活再建に関するデブスインタビュー調査などを実施し、東京の事前防災プロジェクトとして「震災復興まちづくり訓練」の企画運営に、豊島区、八王子市、葛飾区などで展開しています。特に気仙沼の復興支援活動においては、2016年7月に第27回勉強会が開催され、住まい再建支援の目標が一段落したところですが、再建者からの提起があり、今後も集落となりわいの再建を中心に訪問と勉強会を継続していく見込みです。学部ゼミ生、大学院生、RAスタッフ含めて10人程度の体制ですが、杏林大学や工学院大といった他大学の研究室、建築設計事務所やシンクタンクとのコラボレーションを重視し、学生も多くの刺激を受け、自分自身の成長につながっているようです。



なお首都大学東京では2016年1月に「ボランティアセンター」が開設されました。災害時に限らず学生のボランティア活動をサポートすると同時に、ボランティアに関心をもつ学生を対象に「ボランティア・プログラム」を実施し、ボランティアという行動の方法論や手応え感を学ぶ場を提供しています。

告知

● JSTサイエンスアゴラ2016にて
「震災から5年～いのちを守るコミュニティ～」
を開催します

主催: 大阪市立大学都市防災教育研究センター
東北大学災害科学国際研究所
日時: 11月6日(日) 13:30~15:00
日本科学未来館7階未来館ホール
★ハワイエにてパネル展示もあり

● 兵庫県立大学 防災教育研究センターと連携協定を締結しました

防災・減災の研究と教育を推進し、地域密着型の連携拠点の形成、コミュニティ防災力の向上など地域の安全と安心に貢献し、地域社会の形成・発展に寄与できるよう連携、協力して活動していきます。

● 災害時の情報利用に関する協定を締結しました

災害対応または減災に資する活動において、一般社団法人社会基盤情報流通推進協議会が運営するG空間情報センターを通じて提供されるG空間情報(地理空間情報)の利用について協定を結びました。提供いただく情報を災害時や災害対応訓練で活用していく予定です。

「防災まち歩き」の視点：見なれた街から再発見しよう

都市防災教育研究センター 副所長 理学研究科・教授 三田村 宗樹

皆さんは、買い物や遊び、通勤・通学など生活の中で、自分が暮らす街のようすを良く知っています。交番・消防署・病院・コンビニなどがどこにあるか、良くわかっています。学校や職場への通いなれた道のこともそうでしょう。しかし、日常とは違って災害が発生すると状況は一変します。洪水で浸水した低い道路、地震で家屋倒壊した細い通路は通れなくなります。火災が起こるとより広い範囲で移動が困難となります。災害が発生した場合に、皆さんの地域がどのようになりそうかを考えておかねばなりません。そして災害の状況に応じて、地域の皆さんとどのような道を通って避難するのかを心得ておくことが大切です。

行政が示しているハザードマップでは、皆さんの住んでいる地域の大まかな災害に対する状況がわかりますが、家の周辺の街の状況変化は、ハザードマップで示される大まかな情報とはかなり違っていることもあり得ます。もし大雨で河川が氾濫し浸水したら、地震で大きな揺れが襲ったら、津波が押し寄せてきたらなどを考えながら、これまでに国や市町村などが示しているハザードマップを手に持ちながら、「防災まち歩き」をしてみましょう。このまち歩きでは、子供から高齢者まで多様な年齢構成と一緒に歩くことが大切です。子供の視点、高齢者の視点それぞれ違った箇所に危険性を感じていることがあり、意外な危険箇所を発見することもできます。街をよく知る市民が、わが街を多様な視点で見直し、防災力を高めることは、まさにシズンサイエンスといえます。

まち歩きの準備

まち歩きの際にどのような資料を準備すればよいでしょうか。まず、行政が公開している各種のハザードマップは必須です。それぞれの地域特性にあわせて行政はその地域で災害リスクの高いハザードについてまとめてくれていますので、わが街にとってどのような災害に注目すべきかがわかります。役所によっては、ホームページ上の電子地図として災害に関わる多様な情報を公開しています。これに加えて、地形や地盤の状況がわかる地図があると、よりよく地域を理解することができます。これには国土地理院の運営するホームページなどが参考になります。現在の地形図を閲覧できますし、街の昔の様子を知る古い地形図や航空写真も見ることができます。古い地形図はその地域の地形を確認しやすく、かつての土地利用のようすなども参考になります。例えば、かつて水域を埋め立てた土地は地震時に地盤液状化の可能性がある地域だとみられます。昔の街並みは、自然の地形をうまく活用して造られていることがあります。古い集落は周りより少し高い場所にあたり、畑が広がっていたような場所は水はけがよい土地であったりし、地盤液状化が起こりにくい場所だとわかります。一方、昔に田んぼが広がっていた地域は水の集まりやすい低平な土地で、軟弱な地盤であることが多く、地震時に揺れやすく、洪水の際にも浸水しやすい土地となります。

その地域の地名の由来も参考になります。地名は土地の特徴や性状を表すことが多いものです。内陸域でも地名に津・浜・江・洲・島などがつく地名は、水辺や中州などを示します。蛇・竜・龍などがつく地名は土石流が発生するような谷あいにつけられていたりします。地域の市史などを参考に、事前調べをしておくと、わが街の理解が深まります。街の中に災害碑や街の歴史に関する記念碑・顕彰碑なども確認しましょう。これらの石碑もまた、災害履歴・対策が記録されたものであることが多く、かつての災害を知る手掛かりになります。

その地域の地名の由来も参考になります。地名は土地の特徴や性状を表すことが多いものです。内陸域でも地名に津・浜・江・洲・島などがつく地名は、水辺や中州などを示します。蛇・竜・龍などがつく地名は土石流が発生するような谷あいにつけられていたりします。地域の市史などを参考に、事前調べをしておくと、わが街の理解が深まります。街の中に災害碑や街の歴史に関する記念碑・顕彰碑なども確認しましょう。これらの石碑もまた、災害履歴・対策が記録されたものであることが多く、かつての災害を知る手掛かりになります。



防災まち歩きのコースの例(住吉大社周辺)



水防碑(大和川堤防おりの橋近く)


地図情報サイト「マップナビおおさか」

URL : <http://www.mapnavi.city.osaka.lg.jp/webgis/index.html>

防災関連のマップ情報

- ▶ 防災関連施設の位置図
- ▶ 震度分布予測図：上町断層帯地震・生駒断層帯地震・有馬高槻断層帯地震
中央構造線断層帯地震・東南海・南海地震・南海トラフ
巨大地震・液状化予測図
- ▶ 浸水想定区域図：淀川氾濫・神崎川・安威川氾濫・大和川氾濫・寝屋川水
系氾濫・東除川氾濫・内水氾濫・東南海・南海地震津波
南海トラフ巨大地震津波
- ▶ 統計情報マップ：世帯総数・人口総数・人口密度・人口増減率
人口密度増減率
- ▶ 白地図：地形図・航空写真
- ▶ GISで活用できるオープンデータ公開

マップナビおおさかへの
スマートフォン用2次元コード



地図情報サイトの例